

ヴァニョーニ述『天主教要解略』訳注（十九）

主なる神様の十戒の部（訳者補足 続の七）

A・ヴァニョーニ 述  
葛谷 登 訳

前号の拙文を書き上げる前日の四月二十九日にジャミ  
(Catherine Jami)・エンゲルフリート (Peter Engelriet)・ブルー  
(Gregory Blue) 編『明末中国における経世の道と知的刷新—徐  
光啓 (一五六二—一六三三) の異文化統合』(Statecraft and  
*intellectual renewal in late Ming China, The cross-cultural synthesis  
of Xu Guangqi (1562-1633)*, Brill, 2001) の第一部「歴史叙述と  
文脈」(Historiography and Context) の中に収められたドーディ  
ンク Ad Dudink 氏の論文「キリスト教文書の著者としての徐光  
啓の像—書誌学的評価—」(The image of Xu Guangqi as author of  
Christian texts [A bibliographical appraisal]) にいくつかか目を通  
すことが出来た。同書の謝辞 (Acknowledgements) によれば、  
同書は一九九五年三月二十日から二十三日までパリで開催され  
た「徐光啓 (一五六二—一六三三)」、明末中国の学者にして政

治家」(Xu Guangqi [1562 — 1633], Late Ming Scholar and  
Statesman) という国際学術会議の結果をまとめたものである。  
論文の著者のドゥーディンク氏は同書の「寄稿者紹介」  
(ABOUT THE CONTRIBUTORS) によれば、アムステルダム  
で神学を学び、ライデンで中国学を学んだ (一九九五年、博士  
号取得)。(四六四頁)ということである。学位論文は同書の「文  
献目録」(BIBLIOGRAPHY) によれば、「明末におけるキリス  
ト教・五つの研究」(Christianity in late Ming Times: Five studies)  
(四三四頁)である。他に論文として、『南宮署牘』(一六一〇)、『  
破邪集』(一六四〇)、『並びに第一次教難 (南京・一六一六—  
一六一七) にあつた西洋側の報告』(Nangong shudu (1620),  
Poxie Ji (1640), and Western reports on the first anti-Christian  
incident (Nanjing 1616-1617)) (Monumenta Serica 48, 2000, pp.

133-265) 等があるようである(四二四頁)。これらからドゥーデインク氏は明末清初の中国におけるキリスト教カトリックの歴史や思想を専門に研究しておられることが知られる。

訳者は二〇〇一年に出た同書を同じ年に入手しドゥーデインク氏の論文に目を通していたのであるが、そのことが記憶になかった。この一年ほどの間に机の上に無造作に置かれていたものが、同書であることを知り、前号の拙文を書き終える前、最後の段階で机上の同書に拙文と関係のあることが書かれていないかどうか念のために確認しようと思ひ、同書を取り出して同論文を改めて読み直してみたのである。そこには以前に目を通していた跡が明らかに認められたのであるけれども、一つのテーマを念頭に置き読んではいなかったためであろうか、記憶の中に形象化されなかったと思われる。読み進んで行くにつれて、同論文の「『造物主垂象略説』、別名『天主聖象略説』及び『鵝鸞不並鳴説』」(Zaowuzhu Chuxiang Lie shuo or Tianzhu Shengxiang Lie shuo and Xiaolan Bu Bing Ming shuo) (二二四頁—一五二頁)の部分が綿密な方法を用いて『造物主垂象略説』について具体的且つ詳細なことがらを述べているものであることが自ずと感取された。それは拙文で取り上げた疑問、すなわち徐宗澤が『明清間耶穌会士訳著提要』の中で『造物主垂象略説』の出版された年を一六〇九年としている理由に答えるに余りあるものであることを想像させるものであった。

時間の関係上、訳者は同書を読み進むことを一旦休止し、四

月三十日に拙文を書き終えた後、同論文の『造物主垂象略説』に関する箇所を読む作業を再び始めた。その全体を努めて丁寧

に読むことを心がけて読み終えた結果、その感を深くした。同論文の同箇所は『造物主垂象略説』の多くの版本を調査研究した成果をまとめたものであり、『造物主垂象略説』の書誌学的研究として抜きん出た内容なものであると言ふことが許されるのではないであろうか。

二〇一〇年に上海古籍出版社から朱維錚李天綱主編『徐光啓全集』全十冊が出た。主編者の一人である李天綱氏は二〇〇七年に新星出版社から『跨文化的詮釈—経学与神学的相遇』という本を出している。『造物主垂象略説』に焦点を合わせて詳述された密度の濃い内容を有すると思われる『造物主垂象略説』校釈(一九五頁—二〇一頁)という所収の論文は『造物主垂象略説』の作者を徐光啓としている。

この論文の後に「造物主垂象略説」という題の文章が続く(二〇二頁—二〇八頁)。そこには訳注が附された形で『造物主垂象略説』の原文が掲載されている。この文章の末尾に「原題『徐光啓軼文「造物主垂象略説』」、載『中西初識』、大象出版社、一九九九年(二〇八頁)とある。現に李天綱氏の論文は最初一九九九年に書かれ、『中西初識』(大象出版社)に掲載されている(五十九頁—七十頁)。後に二〇〇七年に出版された『跨文化的詮釈』に収められた際には、原文が「造物主垂象略説」という題名のもとに独立した項目として取り上げられている

(二〇二頁―二〇八頁)。このほうは『中西初識』のものとは一部段落の切り方が異なり、注の数も増えている。李天綱氏の論文にドゥーディンク氏の論文への言及が見られないのも宜なるかなであるうか。

ただ二〇〇七年に李天綱氏が自身の論文を『跨文化的詮釈』に再録するまでにドゥーディンク氏の論文を目にしていることも考えられる。訳者は李天綱氏がドゥーディンク氏の論文をどのように評価したのかということについては寡聞にして知らない。しかし李天綱氏がドゥーディンク氏の論文を読んだとすれば、自身の見解を修正し或いは変更する必要が結局のところなという判断に到達したのではないかとも思われる。そうであればこそ、二〇一〇年に出版された『徐光啓全集』の第九冊の巻九「雑文」の中に「造物主垂象略説」が収められたように思われるからである。以上は憶測に憶測を重ねたに過ぎない。

前号の拙文は李天綱氏の論文を手がかりにして書き進めていたので、書き終える間にドゥーディンク氏の論文の一部に目を通したときは衝撃的であった。ドゥーディンク氏は実証的な手法を用いて『造物主垂象略説』の著者が徐光啓ではないことを論証しておられたからである。訳者はなすべがなかった。

前号の拙文を書き終えて後、訳者はドゥーディンク氏の論文と対座した。論文に引用されていたり、言及されている文献に注意し論文を読み進めた。確認のために関係する文献に当たる

作業は些か時間を要した。最後にドゥーディンク氏の論文の全体に目を通して後、それがどれほど奥行き深いものであるかを、訳者は思い知らされたのである。

以下にドゥーディンク氏の論文を読んで不十分な理解ながらも新たに学び得た重要と思われることごらを箇条書き形式に書き記させていただきたい。

一つめはドゥーディンク氏の論文は『造物主垂象略説』について図書館や図書館に現存する世界中のすべてではないかと思われる版本に言及していることである。ドゥーディンク氏はこれらほとんどすべての版本に当たり、書誌学的に質の高い議論を一貫して展開していることである。その成果が一五一頁から一五二頁に掲載された表F (TABLE F) の『造物主垂象略説』の版本 (Versions of *Zaowuzhu chixiang lieshuo*) である。

そこには全部で十二の版本が挙げられている。第一はもと徐家滙所蔵のもの (その後台湾の輔仁大学に所蔵先が移っていたが、現在は台湾の中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館に所蔵されている。目録の番号はA FT022Rである)、第二はヴァティカン図書館 (Biblioteca Vaticana) 所蔵のもの (目録の番号はBorgia Chinese の三三四番の二十一である)、第三はパリ国立図書館 (Bibliothèque Nationale) 所蔵のもの (目録の番号はCatalogue des livres chinois の六九一五番のIV―Vと六九一六番のIV―Vである。後者は前者と同一である)、第四はベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) 所蔵のもの (目録の番

号は Libri sin. の二二二番 (<http://digital.staatsbibliothek-berlin.de/metsresolver/?PPN=PPN3308101807>) である。これは口題や魚尾のない唯一の版本である。ドゥーデインク氏の論文には、*“the only edition with folios without margin and fish-tail”* (一五一頁) とある。*“margin”* は版心を指すのであろうか。実態に即して「口題」に解してみた。「口題」や「魚尾」に関しては陳国慶著／沢谷昭次訳『漢籍版本入門』(研文出版、一九八四年)の 一三〇頁と一〇四頁―一〇五頁の解説並びに長澤規矩也編著『図書学辞典』(汲古書院、一九七九年)の九十二頁と九十六頁に教えられるところであった)、第五はローマ・イエズス会文書館 (Archivum Romanum Societatis Iesu) 所蔵のもの(目録の番号は Japonica-Sinica I の一四〇番である)、第六はパリ国立図書館所蔵のもの(目録の番号は Catalogue de livres chinois の六六九一番と六六九二番である。後者は前者と同一である)、第七はヴァティカン図書館所蔵のもの(目録の番号は Borgia Chinese の三三四番の二十二である。この影印が臺灣學生書局から出ている『天主教東傳文獻三編』の第二冊に収められている)、第九はパリ国立図書館所蔵のもの(目録の番号は Catalogue de livres de chinois の六六九〇番である)、第十はヴァティカン図書館所蔵のもの(目録の番号は Borgia Chinese の三五〇番の十八である)、第十一はローマ・イエズス会文書館所蔵のもの(目録の番号は Japonica-Sinica I の五十三番の五である)―この番号に当たる書籍の名前は『鴉鷺不並鳴説』となっている [Albert

Chan, S. J., *Chinese books and documents in the Jesuit Archives in Rome, An East Gate Book, p.89*)、そして第十二はヴァティカン図書館所蔵のもの(目録の番号は Borgia Chinese の三三四番の二十七である)―この番号に当たる書籍の名前は『鴉鷺不並鳴説』となっている [ペリオ編、高田時雄校訂 補編、郭可訳『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄』中華書局、四十五頁) である。

表Fではこれらの版本を出版年 (Copy date) 一葉表第一行の書名 (Title)、「口題」(Margin)、「題簽」(Title Strip)、「著書」(Author)、「後書」(Colophon)、「並びに後書」(Colophon) 付きの「附録」(Appendix) の『鴉鷺不並鳴説』の有無とその著者 (author)、「そして行格」(Layout) の観点から分類している。

ドゥーデインク氏の論文の注九十四 (一二七頁) において表Fに挙げられた十二の版本のうちの第十のヴァティカン所蔵本 (Borgia Chinese の三五〇番の十八) に関係する凝縮された形での綿密な論述がある。それを敷衍すれば以下のようになるのではないであろうか。すなわち、ペリオ (Paul Pelliot) の *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque vaticane* (a posthumous work, revised and edited by TAKATA Tokio, Istituto Italiano di Cultura Scuola di Studi sull'Asia Orientale, Kyoto, 1995) では Borgia Chinese の三五〇番の十八は *“Tanzhu shengjiao lieshuo 天主教略説 (Traité sur Dieu). Cf. Cordier, N° 2471. 7th Edition de la C. ie de Jésus.”* (下線、訳者注。特に注記しなす限り、以下同じ) (三十三頁) とある。

らに「Edition de la Cie de Jésus」とあるのは直訳すれば、イエズス会 (Compagnie de Jésus) の版 (édition) ということになるであろうか。前掲中国語訳ではこの箇所は、「耶穌會傳教團刻印。」(五十二頁)となっている。思うに、ここは表紙にイエズス会の印が押してあるほどのことを指しているのではないであろうか。

また、コルディエ (Henri Cordier) の *L'imprimerie sino-européenne en Chine. Bibliographique des ouvrages publiés en Chine par les européens au XVIIe et au XVIIIe siècle* (Imprimerie Nationale, Paris, 1901) の二四七番の三には、「天主聖像畧説 *T'ien-tchou cheng siang lio chouo* - *Traité sur Dieu.*」(東洋文庫所蔵本、四十二頁)とある。その後に細字で、「Il y a une éd. de 1719. - *Cat. Klapproth, II, N. 54.*」(同頁)とある。

ここに記されたクラブプロートの *Catalogues des livres imprimés, des manuscrits et des ouvrages chinois, tartars, japonais, etc., composant la bibliothèque DE FEU M. KLAPROTH* (Paris, 1839) の第二部 (Deuxième Partie) の五十四番の二には、「THIAN TCHU CHING SIANG LIO CHOUE: Explication abrégée de la sainte image du maître du ciel。」(東洋文庫所蔵本、十六頁)とあり、その後に小ぢめの字で、「*Cet opuscule du P. Jean de Rooha, portugais, est de l'année ki wei, de Wan ly (1719).*」(同頁)とある。この記述はあらまし、ポルトガル人のローシャ神父による『天主聖像畧説』という小論文は万暦己未の年、すなわち万暦四十七年

(一六一九年) に出版された、ということになるであろう。従ってクラブプロートの目録の記述に「一七一九」とあるのは単純に「一六一九」の誤植であると言える可能性が高いということにもなるであろう。

要するに、コルディエは自らの目録の中でクラブプロートの目録に依拠して『天主聖像畧説』には万暦己未の年の版があるということを述べているのであろう。そのとき己未の年が一六一九年に当たることの確認に至らなかったことも考えられるであろうか。

以上をまとめて分かることの一つめはペリオの目録はゴルディエの目録を参照し、ゴルディエの目録はクラブプロートの目録に依拠していることである。二つめはペリオの目録の *Borgia Chinese* の三五〇番の十八の書名は『天主聖教畧説』となっているけれども、「教」の字は「像」の字の誤りではないかと考えられることである。三つめは *Borgia Chinese* の三五〇番の十八はクラブプロートの目録のIIの五十四番の二と同じ一六一九年の版本であることである。四つめは *Borgia Chinese* の三五〇番の十八はイエズス会の印のある版であると考えられることである。

以上が目録の上からヴァティカン図書館所蔵本である *Borgia Chinese* の三五〇番の十八について知ることが出来たことである。それは繰り返し返すと、一六一九年に世に出されたイエズス会公認の版であるということである。

ドゥーデインク氏は Borgia Chinese の三五〇番の十八の版本を調査して次のように述べる。すなわち、この版本には著者に言及するものはない。しかし羅儒望 (João da Rocha)、黎寧石 (Pedro Ribeiro)、丘良秉 (Domingos Mendes) の三名のイエズス会士が校訂者 (collator) として名を列ねている (一一六頁)。

具体的ながらが注の八十九(一一六頁)に記されている。重要と思われる部分について言葉を補って大まかに訳してみると、次のようになる。すなわち、「天主聖像略説終」の後に二文字分空けて、「耶穌會士羅儒望 黎寧石 丘良秉全校」(傍点訳者注。特に注記しない限り、以下同じ) という語句が続くようである。ここに「校」という字が用いられていることは、この版が由校を諱とする熹宗(『明史』卷二十二、「本紀」第二十二)の天啓年間ではなく、翊鈞を諱とする神宗(『明史』卷二十、「本紀」第二十)の万暦年間に出版されたことを示唆するものである。

ドゥーデインク氏の論文ではさらにヴァティカン図書館所蔵の三五〇番の十八と版を同じくするものとして内閣文庫所蔵のものが取り上げられている(一一六頁—一二七頁)。これは「天啓四年(一六二四年)以降、ほどなくして出版された」("published shortly after 1624")ところのものであるらしい。しかしヴァティカン図書館所蔵とは異なり、そこには三人の校訂者 (reviser) の名は記されていない(一二六頁—一二七頁)。

内閣文庫の版本が天啓四年(一六二四年)以降のものであることは注の九十一(一二七頁)に詳述されている。それによれば『天主聖像略説』の版本は『天主十誠解略』と合わさって一冊をなす格好になっている。その『天主十誠解略』の冒頭に位置する「西學十誠初解序」の文章の最後に、「天啓四年秋福清葉向高書」(六葉裏)と書いてある。従って合訂本の体裁をなす書に収められた一方の『天主聖像略説』もまた天啓四年(一六二四年)以降に出版されたことになるわけである。

ドゥーデインク氏の論文ではこれらに加えて一六一九年版のものがベルリンに二部存在していたことが述べられている(一八三頁)。そこに引用されているクラブロートの『ベルリン王立図書館漢滿刊本・手稿本目録』(Verzeichniss der chinesischen und mandchuischen Bücher und Handschriften der Königl. Bibliothek zu Berlin (Paris, 1822)) の箇所を注の九十三によって確認すると、"V. 認各像語出天 Thian-dschü-sching-siang-lió-schue, KURZE ERKLÄRUNG VOM HEILIGEN BILDE DES ERLÖSERS. VERFASST im Jahre 1619 von dem Portugiesischen Jesuiten Juan da Rocha, oder wie er im Chinesischen heisst 認識羅 Ló-shü-wáng;" (東洋文庫所蔵本、一八三頁)となる。大まかな意味は、救い主の聖像の簡略な解説であるところの『天主聖像略説』は一六一九年にポルトガル人イエズス会士ローシャ(中国語では羅儒望と呼ばれる)によって著わされた、ということになるのであろうか。

コルデイエは先述のようにクラップローットの目録にも目を配り、『天主聖像略説』（一六一九年版）がローシヤによって著わされたとしている（二二七頁）。しかし、ゾンメルフォーゲルはこの文章が『天主聖教啓蒙』と同一の著作ではないかと示唆した。（同頁）のである。としようのもゾンメルフォーゲルの時代にはローシヤが『天主聖像略説』を著わしたということが周知の事実になっていなかったからである（同頁）。

注の九十四には、『Sommervogel, VI, col. 1931.』とある（同頁）。ゾンメルフォーゲルの『イエズス会書誌』（*Bibliothèque de la Compagnie de Jésus*）の tome vi の colonne 1931 には、『ROCHA, Jean da, ou ROCCIA』とつう項目があり、その「2」の箇所に「Tien tehou cheng kiao ki mong. [Clavis ad aperitendam legem Dei.] 1619. Klapproth dans son *Catal. des livres et MSS. chinois de la bibl. de Berlin*, p.183, cite: Tian teh ching siang hio choue. [Explication abrégée de la sainte image du maître du ciel.] Est-ce un ouvrage différent du précédent cité par M.Cordier, d'après Fournmont? (*Essai d'une bibliogr. des ouvrages publiés en Chine par les Européens*, p.34.) Solwei. — Machado, II, 736. — Cardoso; — de Backer, III, 242.」（愛知大学名古屋図書館所蔵）とある。

ただ、『イエズス会書誌』の中に引用してあるクラップローットの記述は『ベルリン王立図書館刊本・手稿本目録』の中にあるものではなく、クラップローットの他の目録である *Catalogues des livres imprimés, des manuscrits et des ouvrages chinois, tartares,*

*japonais, etc., composant la bibliothèque DE FEU M.KLAPROTH* (1839) の第二部の五十四番の二の中の記述であると思われる（東洋文庫所蔵本、十六頁）。

またコルデイエの *Essai d'une bibliographie des ouvrages publiés en Chine par les Européens au XVIIe et au XVIIIe siècle* (Paris, 1883) の抜刷一本体は *Mélanges orientaux: textes et traduction publiés par les professeurs de l'école spéciale des langues orientales vivantes: a l'occasion du sixième congrès international des orientalistes réuni a Leyde, septembre 1883* である。同書については極東書店の雨谷好倫さんに「教示いただいた。記して感謝するの該当箇所（五二八頁）には、三十七番目にローシヤの項目が掲げられ、『天主聖教啓蒙』の一書のみ言及されていて、『Fournmont CLXXVIII』（同頁）とある。

ゾンメルフォーゲルの『イエズス会書誌』の記述を見る限り、ゾンメルフォーゲルは『天主聖像略説』がコルデイエの書に挙げられた『天主聖教啓蒙』とは別の文章であるかと問いを投げかけているように感ぜられる。確かなことは「2」の箇所に於いて『天主聖教啓蒙』に並ぶ形で『天主聖像略説』が記されていることである。

これに対して、ペリオはコルデイエの *L'imprimerie sino-européenne en Chine. Bibliographie des ouvrages publiés par les Européens au XVIIe et au XVIIIe siècle* の書評において書名と著者と出版年（一六一九年）を同じくする版本が *Bibliotheca*

Lindesiana に所蔵されているという理由から、クラブプロットの記述に誤りがない論評している（一二七頁）。

注の九五（一二七頁）に記されたペリオの一九〇三年の文献は「BIBLIOGRAPHY」（四四六頁）によれば「Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient (3-1:108-116)」に掲載された書評である。該当箇所の二四七番（N° 247）には、「On n'avait au sujet de cet ouvrage que la mention de Klaproth (*Verzeichniss der chinesischen und mandschuischen Bücher und Handschriften der kgl. Bibliothek zu Berlin*, p.183), qui écrit le nom de l'auteur 羅如望 Lo Jou-wang et non 羅如聖 et date l'édition de 1619 (le 1719 du mémoire de M.C. est une faute d'impression). Le P.Sommervogel (VI.1931) se demandait si l'ouvrage n'était pas identique an N°245, mais aujourd'hui le doute n'est plus permis: un exemplaire, portant le titre même donné par Klaproth, et également daté de 1619, est porté au *Catalogue de la Bibliotheca Lindesiana*, p.57, n° 30 b).」（東洋文庫所蔵本、一一三頁—一一四頁）とある。これはドゥーディンク氏の論文の中で紹介されていることと内容的に一致するよう思うられる。

要するに、一六一九年の版本についてクラブプロット、コルダイエ、ペリオの三者はローシャが著者であると見なしていることになるのではないであろうか。

更にドゥーディンク氏の論文は、「徐家滙所蔵本は『耶穌會士羅如望謹述』と記されていると主張する」（「Moreover,

another copy of *Tianzhu shengxiang lieshuo* at Zikawei claims to be "reverently narrated by the Jesuit João da Rocha" (*Yesu huishi Luo Ruwang jinshu*). p.128) と述べる。そしてその根拠を注の九十六で示している（一二八頁）。

注の九十六が記すところの徐宗澤編著『明清間耶穌會士譯著提要』（臺灣中華書局、一九五八年）卷十「徐匯巴黎華諦岡圖書目」の「徐匯書樓所藏明末清初耶穌會士及中國公教學者譯著書目」の「200 宗教」の四番めに、「聖像略説」（四二三頁）とのみ記してある。卷三「眞教辯護類」の中に「天主聖像略説」という項目がある（一七六頁）。そこには、「耶穌會士羅如望謹述：此書先言天主是生天生地生神生人生物の一箇大主宰：繼言爲何天主生造天、地、神、人、物等、及天堂地獄、天主降生受苦、救贖、復活、升天：卒言耶穌遺宗徒傳教於普世、及爲何當今亦有傳教士等等。而講解此等道理、皆借解耶穌聖像爲動機。此書刻於一六〇九年：亦名造物主垂象略説、係語體文。」（一七六頁）とある。

以上から総合すると、ドゥーディンク氏の論文は、『譯著提要』中の徐宗澤の「耶穌會士羅如望謹述」（一七六頁）という記述に拠って版本の本文にこれと同じ語句が記されている可能性が高いと主張するにとどまっているのではないであろうか。ここには主張の正しさを確認されたことを示す記述はないように思う。



三つめは徐宗澤『明清間耶穌會士譯著提要』において『造物主垂象略説』の出版年を一六〇九年と記しているのは一六一九年の誤植であるということである(注九十六、二二八頁)。それは徐宗澤が情報源としたとされるフィステルの『明清(一五五二—一七七七)中国イエズス会士列伝及び書目』の記述が一六〇九年となっているからである(第一巻、六十九頁)。

フィステルの同書における関連文献の正確な言及は他にもある。彼の『明清(一五五二—一七七七)中国イエズス会士列伝及び書目』第一巻の六十九頁の「2. 天主聖像略説」の箇所でクラブロートの著者の関係箇所を、「t. II, p. 54.」としていることである。ドゥーディンク氏の論文では正確に「Klaproth 1839:16, no. 54, 2」(注九十四、一二七頁)とある。

既出の *Catalogues des livres imprimés des manuscrits et des ouvrages chinois, tartes, japonais, etc., composant la bibliothèque DE FEU MKLAPROTH* の五十四番の二の箇所の全体は、「THIAN TCHU CHING SIANG LIO CHOUË; Explication abrégée de la sainte image du maître du ciel. Cet opuscule du P. Jean de Rocha, portugais, est de l'année ki wei, de Wan ly (1719).」(東洋文庫所蔵本、十六頁)となっている。

更にドゥーディンク氏の論文では一八二二年にパリで出版されたクラブロートの『ベルリン王立図書館漢滿刊本・手稿本目錄』の関係箇所(p. 183, no. 5)が一二七頁に引用されている。既述のように、それによればベルリン王立図書館所蔵本は

一六一九年の版本であり、著者はローシャとされる。

しかし、ドゥーディンク氏の論文の一五一頁にある表Fに記されたベルリン国立図書館 (*Staatsbibliothek zu Berlin*) 所蔵本は一六一五年版である。ベルリン国立図書館はブッセ、エルネストウス原著、プラスマン、ゼーフェルト改訂(都築正巳監訳、竹之内、渡邊、伊藤、佐々木編訳『ドイツの図書館—過去・現在・未来—』(日本図書館協会、二〇〇八年)によれば、「一七〇一年に『王立図書館』となり、一九一八年の王国の崩壊と自由州プロイセンの設立後は『プロイセン国立図書館』となった。」(一二七頁)のであり、第二次世界大戦後にはプロイセン文化国立図書館と東ドイツ国立図書館に分かれ、一九九二年に『プロイセン文化財団ベルリン国立図書館』という名の下に両図書館の統合が実現された」(一二二頁)というものである。日常生活の中で「Stabi」と呼ばれる同図書館については、*Monumenta Serica* の編集長であられる神言会(Zhigiew) 神父様からもご教示いただいた。記して感謝す。つまり、現在のベルリン国立図書館にはかつて王立図書館時代に所蔵されていたとされる一六一九年版はその所蔵が確認されない状態にあるということになるのである。

四つめはドゥーディンク氏の論文では『造物主垂象略説』の実際の著者はローシャである可能性が高いけれども、また徐光啓も関係したことが考えられるという内容のことが述べられて

いる（一二九頁）。

その理由の一つは『造物主垂象略説』に附された楊廷筠の後書きは著者が徐光啓とされるすべての版にあるが、著者が「耶穌會士」とされるものでは一つだけであり、その場合後書きの最後は「彌格子識」となっているということである（一二八頁、一二九頁）。『造物主垂象略説』では中国の古典の中に認められる「上帝」という語が“Deus”すなわち神という意味で使われておらず、それ故に楊廷筠は実際の作者であるイエズス会士を後書きを通して批判した形になる（一二八頁）。

更に著者が徐光啓に帰せられた版は版心に書かれた書名が『聖象畧説』となっていることが特徴である。他方、それ以外の版の場合は、版心に記された書名は『天主聖像略説』となっている（一二八頁）。この書名は万暦四十四年（一六一六年）の南京教難の際、押収された南京教会の所蔵書籍の「惑衆之書」（四十三葉裏）のリストの中に、「天主聖像畧、計拾參本」（尊經閣文庫所蔵『南宮署牘』卷之三、四十三葉表）というように現われる。但し南京教会から押収した物品の帳簿を作成した役人が「説」の字を書き漏らしたものと思われる（注九十八、一二九頁）。つまり、役人が帳簿に書き記す際に見た版心に記された書名が『天主聖像略説』であったと推測されるということは、南京教会に所蔵されていた版本は作者を「耶穌會士」とするものであったということになるであろう（同頁）。さらにまた作者を「耶穌會士」とする版本のほとんどすべて

に楊廷筠の後書きが附されていない（一二九頁、一五一頁）。つまり、『造物主垂象略説』の本文に「上帝」という語が用いられていないことへの批判的見解を示した楊廷筠の後書きが宣教師を作者とすると思われる版に附されることは考えにくく、この版が世に出てしばらくして後に楊廷筠の後書きを附したものが世に出たものと考えられる（一二八頁、一二九頁）。

「耶穌會士」を作者とする版本に楊廷筠の後書きが附されているものはベルリン国立図書館所蔵本のみで、そこでは後書きの最後は「彌格子識」（八葉表）となっている。他方、徐光啓を作者とする版本のすべてに楊廷筠の後書きが附され、後書きの最後は「楊廷筠識」となっている（一二九頁、一五一頁）。つまり、楊廷筠の靈名の「彌格子」を用いて著わされた後書きが時間的に先のものである可能性が高い（同頁及び注百）。第一版が楊廷筠の後書きや『鴉鷺不並鳴説』を有さないとすれば、ヴァティカン図書館所蔵本（Borgia Chinese 33421）と徐家滙本が第一版に当たるであろう（同頁）。

ドゥーディングク氏の論文において『造物主垂象略説』の版本の作者に関する議論の最後のほうで大略次のように述べられている。

このように、ジョアン・ダ・ローシヤ (João da Rocha) が実際の作者であったに相違なかるうけれども、徐光啓が『造物主垂象略説』の作成に関わっていたこともあり得るのである。ローシヤはかつて徐光啓に洗礼を授けており、一方

徐光啓はローシャを―西側の関係資料が述べるように―自身の霊的な父と見なしていたから、徐光啓は一般大衆に向けた文書の作成に当たりローシャの仕事を手伝ったのかも知れない。紛う方なく西側の宣教師の視点から作成されたこの文章は言葉と内容の点で相当に単純素材である。それはいかなる儒教の術語も用いていない（一二九頁）。

以上、訳者がドゥーデインク氏の論文を読んで重要と思われることから書き列ねてみた。取り上げるべきはずのもので取り上げていないものもあるのではないかと思われる。不十分な点は諒とされることを願う。

以下にドゥーデインク氏の論文について訳者が思いついたことを順不同に述べてみたい。

一つめは『造物主垂象略説』の作者についてである。ヴァティカン図書館所蔵の一九一九年版 (*Fonds Borgia Chinois 350.18*)。〔中華書局『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄』、五十二頁〕には作者名は記されず、単に三人の校訂者、すなわち羅如望 (Lào da Rocha)、黎寧石 (Pedro Ribeiro)、丘良秉 (Domingos Mendes) の名前が挙げられているにすぎないからである（一二六頁）。ただ徐家滙所蔵となっていたもの（巻十「徐匯巴黎梵諦岡圖書目」）― 徐匯書樓所藏明末清初耶穌會士及中国公教學者譯著書目〕〔200宗教〕徐宗澤『明清間耶穌會士譯著提要』（臺灣中華書局、一九五八年、四二三頁）は先述のように、『天主

聖像略説』の解説欄に「耶穌會士羅如望謹述、」（一七六頁）とあるのみである。また作者が校訂者に名前を列ねることは考えにくいように思う。それゆえにローマのヴァティカン図書館所蔵の版本の校訂者についての記述は逆にローシャが『造物主垂象略説』の作者である可能性を排除するものではないであろうか。

また徐光啓とローシャ間の交渉に関しても別の見方があるように思われる。王重民著、何兆武校訂『徐光啓』（上海人民出版社、一九八一年）の「附録一 徐光啓大事年表」によれば、徐光啓は一六一三年（万曆四十一年）に「告病回籍」（一七七頁）とある。病気を理由に原籍地に帰ったということであろう。そして一六一四年（万曆四十二年）と一六一五年（万曆四十三年）は「在天津屯田」（一七八頁）となっている。天津に滞在し、農耕関係の仕事に従事したということであろうか。『造物主垂象略説』が世に出たとされる一六一五年は徐光啓は天津に居住していたわけである。彼は一六一六年（万曆四十四年）の五月二十日（七月三日）に北京にて職に復している（同頁）。

他方、ローシャは馮承鈞訳になるフィステルの書『在華耶穌會士列伝及書目 上』（中華書局）によれば、一六〇九年には江西省の南昌にいたことになっている（七十二頁）。そして南京教難が起きた年の一六一六年には同じく江西省の建昌に難を逃れている（同頁）から、一六一五年までは彼は南昌にいたということであろうか。

とすれば、一六一五年頃において徐光啓は天津に、ローシャは南昌にいたことになる。天津と南昌は地理的に大きく隔たっており、頻繁に連絡し合うことは難しいであろう。いかんともし難い地理的制約の下に置かれた徐光啓とローシャの間に一部の書物の作成をめぐって協力関係があったと考えるのは考えにくいのではないであろうか。

さらにこのことさらに関してドゥーデインク氏の論文の注九十一（一二七頁）に興味深い重要なことが指摘されている。その内容は以下のようなものである。すなわちヴァニョーニの『天主教要解略』の「天主十誠」の部の第一誠の箇所に「見敬聖像論」（十五葉表）という割注がある。この『敬聖像論』が『天主聖像略説』を指しているのではないか。というのも『教要解略』の中から「天主十誠」の部を『天主十誠解略』という題名を附して独立した形で欽一堂より出された『天主十誠解略』の後に『天主聖像略説』が続いているからである。

『天主教要解略』の割注の前の部分は、「又曰、天主本無形聲、欽崇以心、奚必像乎。曰、吾輩欲由像攝念、使時時提醒耳。」（十五葉表）となっている。つまり、不可視的な存在である神に可視的な像を通して意識を集中させるのである。像は必要であるというものである。

ドゥーデインク氏の論文は『造物主垂象略説』の中の「上邊供敬的正是 耶穌聖像也。」（臺灣學生書局『天主教東傳文獻三編（二）、五五七頁』）という文を引用して（一二四頁）、これは

教会堂の中の祭壇や高い場所に置かれた像について言及しているに違いない。（同頁）とする。引用文の直前の部分は、「名曰 耶穌、解曰救世者。」（『東傳文獻三編（二）、五五七頁』）となっている。つまり、教会堂の中の高いところに置いて敬い尊ぶところのものは救い主なるイエスの像であるということを説明しているであろう。

『造物主垂象略説』という題名は教会堂の中に掲げられた造り主なる神の図像について解説するものであると考えられ得る。論文では「垂象」は「垂像」と解され、『易』「繫辭上傳」の「天垂象、見吉凶、」（岩波文庫『易経 下』、二四二頁）の「垂象」という語とは恐らくは異なる意味であろうとしている（注八十三、一二五頁）。それならば『造物主垂象略説』という題名と『敬聖像論』という題名は表示しようとする内容が互いに重なり合う可能性が高くなるのではないであろうか。

論文では『敬聖像論』の作者について言及されていない。ヴァニョーニの『天主教要解略』は一六一五年（万曆四十三年）に世に出ている。また『造物主垂象略説』も同じ年に出ていると考えられる。つまり、ヴァニョーニは『天主教要解略』の十戒の部の第一戒の解説のために補足として別に『敬聖像論』を著わしたと、そして後にその題名が『造物主垂象略説』に変更されたとは考えられないであろうか。

『造物主垂象略説』の制作年は一六一五年と一六一九年とされる。漢の元寿二年に主の降誕があり、それは一六一五年前、

一六一九年前の出来事であったという一節が本文の中に出て来るからである。元寿二年は、西暦紀元一年に当たる。そうであるならば『造物主垂象略説』の制作年は一六一六年と一六二〇年という可能性も出て来るであろう。前者は南京教難が起きた年である。

リッチの後に中国イエズス会の長上―フィステルの原著では 'supérieur général' (第一巻、六十頁)。この訳語についてはイエズス会の山岡三治神父様にご教示いただいた。記して感謝す―となっていたロンゴバルドは北京にいた。ヴァニョーニは『敬聖像論』を書き終えた年、Nihil obstat という形での同書の出版を思い立ち、許可申請のために草稿を北京のロンゴバルドのもとに送ったと考えることは許されないであろうか。

この一六一五年には、徐光啓は梁家勉編著『徐光啓年譜』(上海古籍出版社、一九八一年)によれば、病のため官職から離れ、農業と著述の日々を送っていた。著作として『關妄』、『誦語偶編』、『擬復竹窗天説』があり、これらはいずれも「關仏老」と「補儒」、すなわち仏老思想を排し儒教思想を支持することを意図した書物であった(一〇九頁)。

この時期、徐光啓はカトリック信者として護教文書の作成に尽力していたように見える。このうちの『關妄』は内容上、『造物主垂象略説』の補編のような位置にある。というのも、『造物主垂象略説』ではその最後の部分で紙銭などの仏教の習俗を批判している。他方、『關妄』は紙銭も含めて全部で八つの項

目から仏教を多面的に批判している。

天津は北京からほど近くにある。徐光啓は一信徒として北京のカトリック教会と連絡を保つ内的必要があったのではないであろうか。従って徐光啓とロンゴバルドの間に天に至る道についての交渉があったということは想像に難くないであろう。

訳者はこの交渉の中で以下のことが起きたのではないかと臆測するものである。すなわち、ロンゴバルドは中国イエズス会から公認されることを期してヴァニョーニから送られて来た彼の手になる『敬聖像論』の存在を徐光啓に伝えた。それを聞いて徐光啓は閲覧を求めたところ、ロンゴバルトは人を介してそれを徐光啓に渡したのである。

そして『敬聖像論』を手にした徐光啓はこれを熟読した後、一部の書き換えと加筆の必要を感じてロンゴバルドに自らの意見を伝えた。そこでロンゴバルドは徐光啓の願いを容れて『敬聖像論』の一部を書き改め、また新たに文章を書き加えたのである。この時点で当初の『敬聖像論』の文章の体裁と趣とは些か隔たりを生じていたことであろう。そしてロンゴバルドは最後に題名を『敬聖像論』から『造物主垂象略説』に変え、述者名をヴァニョーニから徐光啓に改めたのである。述者名の変更は自ずと同書の中国の知識人や民衆への影響力を増大させたことであろう。

ところで『造物主垂象略説』には「改悪遷善」、「改悪為善」、「為善去悪」という明代の儒教思想を特徴的に表わすと思われる

るような語が出現する。これらの語は徐光啓が「弁学章疏」の中で用いた「遷善改過」という語ともその奥底において通じるものではないであろうか。つまり、「為善去悪」などの東林派の思想に連なり得る語は徐光啓を述者に想定することにより思想的な広がりを獲得するものであるように思われる。

さらに、最後の部分の仏教や道教の宗教的習俗に関する批判はやや唐突の趣があり、議論は十分に尽くされていないように感ぜられる。この部分こそは徐光啓が新たに書き加えたものではないであろうか。これらも訳者の臆測である。

『造物主垂象略説』が世に出て間もない頃の一六一六年（万曆四十四年）には中国のカトリック教会に対して初めての迫害である南京教難が起きた。これに対して徐光啓らの奉教士人―「明末儒教とカトリック伝道」（一九五七年）に初出すると思われる後藤基巳先生の用語―は自らの信ずるところを公に言い表わした。

この頃に徐光啓の名で出された著述として『造物主垂象略説』や『闢妄』が問題になったであろうことはいとも容易に想像される。それゆえに『造物主垂象略説』は述者を「耶穌会士」に書き替えられたのではないであろうか。書き換えは累が徐光啓にまで及ぶことを慮つての苦肉の策であったことであろうと思われる。またそれは権力から排除されるに至った宣教師の思想的連帯者としての奉教士人の足元を守る意味があったのではないであろうか。

同じことは『闢妄』にも当てはまることであろう。臺灣學生書局『天主教東傳文獻續編』第二冊に収める『闢妄』はヴァティカン図書館所蔵になるもので、Fonds Borgia Chinois, 第三二四番の十六である（中華書局『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄』、四十頁）。この本の二葉表の一行めの上部に題名が印刷されているが、二行めの下部は墨で塗り潰されているように見える。この部分をフランス国立図書館所蔵の漢籍第七一〇一番（インターネットの <http://archivesmanuscripts.bnf.fr/cdc.html> より検索）で確かめると、「吳淞徐光啓撰」となっていた。作者名の箇所塗抹は述者名の書き換えと同様の意図に基づくものではないであろうか。

以上、要するに『造物主垂象略説』は最初そのものになる『敬聖像説』をヴァニョーニが『天主教要解略』と同時期の一六一五年に作成し、それに対して徐光啓が一部字句を置き換え、文章を新たに書き加えて徐光啓を述者とする形で『造物主垂象略説』の題名で一六一五年或いは一六一六年に世に出たものと考えてみたいのである。もし一六一六年に出ていたとすれば、教難が起きる六月（顧衛民『中国天主教編年史』上海書店出版社、二〇〇三年、一二二頁）以前のことであり、作者名にかかわる対応はそれだけに一層急を要したものと思われる。

訳者はドゥーディンク氏の論文から多くの重要なことがらをお教えいただいた。大いに感謝するものである。以上はその反芻の次第を不揃いのまま (incoherent) 書き列ねたものである

(続)。

付記 一

訳者は二〇一六年八月二十三日(火)より八月二十五日(木)まで台湾の中央研究院の傅斯年図書館に通った。そこでドウーディング氏の論文の一二八頁の注九十六に記された徐宗澤『明清間耶穌會士譯著提要』(臺灣中華書局、一九五八年、四二三頁)の卷十「徐匯巴黎華諦岡圖書目」の「一 徐匯書樓所藏明末清初耶穌會士及中國公教學者譯著書目」[200 宗教]の中で四番めに記された『聖像略説』を閲覧することを許された。

同図書館の「全文影像資料庫」の書誌情報によれば、同書は題名が「造物主垂象略説」であり、また関連する封箋の題名が「聖像略説」であり、版心の題名が「天主聖像略説」である。撰述者については「耶穌會士述」となっている。版本は抄本である。「稽核項」という項目には、「一冊；二五公分」とある。行格は九行×十九字である。収蔵印記は「有耶穌會中華省印記」である。

この書誌情報について訳者は二つの点で見解を異にする。同書は「抄本」ということであるが、長澤規矩也『図書学辞典』(汲古書院、一九七九年)によれば、「抄本」とは「写本の漢語。」(三十三頁)である。訳者には同書は写本ではなくて、印刷された本であるように見える。もしそうであれば、同書は「出版された本。」(四十一頁)であるところの「刊本」(同頁)や「版本」(同頁)と呼ばれるところのものではないであろうか。ま

たもう一つの点は行格についてである。書誌情報によれば、行格は九行×十九字である。しかしこれでは字数が一つ足りなく、実際は九行×二十字ではないであろうか。

書誌情報には記されていないが、本文は七葉表までである。楊廷筠による後書きは認められない。そして同書は行格、字体の点でバリ国立図書館所蔵漢籍第六九一五番のⅥの『造物主垂象略説』に相似する。

訳者は傅斯年図書館の閲覧室にて徐家匯本と内閣文庫本の間での字句の異同を追いかけてみたところ、相異なる箇所を全部で七つ、拾い出すことが出来た。

第一は内閣文庫本の二葉裏の二行めの「其靈魂亦得居於天堂。」という箇所である。この中の「於」という字は、徐家匯本では「于」という字になっている。

第二は内閣文庫本の二葉裏の五行めの「名曰露際弗尔。」という箇所である。この中の「尔」という字は、徐家匯本では「爾」という字になっている。

第三は内閣文庫本の四葉裏の九行めの「揀選宗徒十二人顯出許多聖蹟。」という箇所である。この中の「蹟」という字は、徐家匯本では「賢」という字になっている。

第四は内閣文庫本の五葉表の「賞報善惡」という語句である。この語句に相当する箇所は、徐家匯本では「賞善罰惡」となっている。

第五は内閣文庫本の六葉表の一行めの「是于、天主位下立了

功勳。」という箇所である。この中の「于」という字は、徐家匯本では「於」という字になっている。

第六は内閣文庫本の七葉表の「今釋道家、要人施舍些錢財。」という箇所である。この中の「舍」という字は、徐家匯本では「捨」という字になっている。

第七は内閣文庫本の七葉表の四行めの「謂 天主聖像、與釋道二家的像一般。」という箇所である。この中の「的」という字は、徐家匯本では「之」という字になっている。

他の版本はどうなっているのでしょうか。まず臺灣學生書局から出ている『天主教東傳三編』第二冊所収の『造物主垂象畧説』についてみてみたい。同書はヴァティカン図書館に所蔵されている漢籍の『Borgia Cinese』の第三三四番の二十一である（ペリオ編、高田時雄校訂・補編、郭可訳『梵蒂岡圖書館所藏漢籍目録』中華書局、二〇〇六年、四十五頁）である。内閣文庫本と異なる徐家匯本の字や語句に対応する箇所について見てみると、臺灣學生書局本では第一の箇所は「於」（一葉裏、四行め〔五五〇頁〕）、第二の箇所は「爾」（二葉裏、七行め〔五五二頁〕）、第三の箇所は「蹟」（五葉表、五行め〔五五七頁〕）、第四の箇所は「賞善罰惡」（五葉表、九行め〔五五七頁〕）、第五の箇所は「于」（六葉表、六行め〔五五九頁〕）、第六の箇所は「舍」（七葉表、八行め〔五六一頁〕）、第七の箇所は「的」（七葉裏、二行め〔五六二頁〕）である。

學生書局本は第二と第四の箇所が徐家匯本と同じである。但

し第四の箇所の「罰」という字は徐家匯本では「罰」となっている。

次にベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) 本について同様な観点から見てみたい。ベルリン国立図書館本では第一の箇所は「於」（一葉裏、四行め）、第二の箇所は「爾」（二葉裏、七行め）、第三の箇所は「賢」（五葉表、五行め）、第四の箇所は「賞善罰惡」（五葉表、九行め）、第五の箇所は「于」（六葉表、六行め）、第六の箇所は「舍」（七葉表、八行め）、第七の箇所は「的」（七葉裏、二行め）である。

ここからベルリン国立図書館本は第二、第三、第四の箇所が徐家匯本と同じであることが分かる。

今度はローマ・イエズス会文書館 (Archivum Romanum Societatis Iesu) 本について同様な観点から見てみたい。ローマ・イエズス会文書館本では第一の箇所は「於」（一葉裏、六行め）、第二の箇所は「爾」（三葉表、五行め）、第三の箇所は「蹟」（六葉表、四行め）、第四の箇所は「賞善罰惡」（六葉表、八行め）、第五の箇所は「于」（七葉表、八行め）、第六の箇所は「舍」（八葉裏、五行め）、第七の箇所は「的」（八葉裏、八行め）である。ここからローマ・イエズス会文書館本は第二、第四の箇所が徐家匯本と同じであることが分かる。但し第四の箇所の「罰」という字は徐家匯本では「罰」という字になっている。

さらにパリ国立図書館 (Bibliothèque Nationale) 所蔵になる漢籍第六九一五番の二について同様な観点から見てみたい。パリ



国立図書館本では第一の箇所は「于」(一葉裏、三行め)、第二の箇所は「爾」(二葉裏、六行め)、第三の箇所は「聖蹟」(五葉表、一行め)、第四の箇所は「賞善罰惡」(五葉表、五行め)、第五の箇所は「於」(六葉表、二行め)、第六の箇所は「捨」(七葉表、二行め)、第七の箇所は「之」(七葉表、五行め)である。

ここからパリ国立図書館本は第一、第二、第四、第五、第六、第七の箇所、すなわち第三の箇所を除くすべての箇所において徐家匯本と同じであることが分かる。

またパリ国立図書館所蔵になる漢籍第六六九〇番はローマ・イエズス会図書館本と版本を同じくする。漢籍第六六九〇番について同様な観点から見てみたが、字の異同に関してローマ・イエズス会図書館と事情を同じくしている。

以上の異なる版本との比較を通して、徐家匯本はパリ国立図書館の漢籍第六九一五番の二と行格と字体において同一ではないかと思われる。ただ一つ異なるのは字の異同において第三の箇所が徐家匯本では「聖賢」となっているけれども、パリ国立図書館本では「聖蹟」となっていることである。

いま全文の見られる漢籍第六九一五番の二について文字の形の中から仔細に見てみて次のことが言えるのではないかと思われる。すなわち、第一に全般に字形が鋭角的に見えることである。また第二に同一の字が同一の字形或いは同様の字形をもつて繰り返し現われることである。

これらはこの版本が金属活字を用いたものであることを物語

るものではないであろうか。張秀民・韓琦『中国活字印刷史』(中国書籍出版社、一九九八年)には明代において江蘇、浙江、福建の地域で銅活字が広まったことが詳述されている(三十二頁―四十九頁)。これらの地域は明末にカトリックが伝えられた中国の地域とも重なるのではないか。また錢存訓著、鄭如斯編(久米康生訳)『中国の紙と印刷の文化史』(法政大学出版局、二〇〇七年)に掲載された図九〇は『古今圖書集成』の字形の変異。(二一六頁)を例示している。本文には、「印刷された書籍を考察すると、一般に一組の銅活字を彫刻したのであり、鑄型によつて鑄造したものではない、と認められる(図九〇)。(二一七頁)とある。従つて、同一の字の活字は必ずしも同一の字形であるとは限らないことになる。

更に徐家匯本とパリ国立図書館本との間で字の相異が第三の箇所においてのみ認められることもその感を深くさせる。活字版であるからこそ、活字を一個入れ替えることによつて一字のみ異なる印刷が可能になると思われるからである。

徐家匯本と他の版本との時間上の先後関係はどうなるのだろうか。徐家匯本とパリ国立図書館所蔵の漢籍第六九一五番の二は文字の異同に関して第三の箇所のみが異なっている。臺灣學生書局本、ローマ・イエズス会図書館本、ベルリン国立図書館本のいずれも、第三の箇所は「聖賢」になっている。この箇所は前後の部分まで含めると臺灣學生書局本では、「降生爲人三十二年、在世親傳經典揀選宗徒十二人、顯出許多聖蹟、」(五

葉表（五五七頁）となっている。意味はあらかし、主はこの世に降って人ととなり、三十三年の間、自ら聖書の教えを伝え、使徒を十三名選び、多くの奇跡を行なわれたというほどになるのではないであろうか。つまり「聖賢」は誤りであり、「聖蹟」が正しいことになる。そうであるとすれば、徐家匯本の誤りがパリ国立図書館の漢籍第六九一五番の二の中で直されたことになり、徐家匯本が漢籍第六九一五番の二より時間的に先に位置することになるのではないか。

それでは徐家匯本とパリ国立図書館本のグループと他の臺灣學生書局本、ベルリン国立図書館本、ローマ・イエズス会文書館本と内閣文庫本との関係はどのようなのであろうか。字の異同について第六の箇所と第七の箇所が徐家匯本とパリ国立図書館本のグループと他の版本とでは対照的である。前者では第六の箇所が「捨」であり、第七の箇所が「之」であるのに対し、後者ではいずれも第六の箇所が「舍」であり、第七の箇所が「的」である。但し、内閣文庫本では第六の箇所の字形は「舍」となっている。

第六の箇所では「舍」は「舍」と字体を異にするにすぎず、両者は同じ字である。また、「舍」は「捨」と文字を異にするが、この場合、「舍」は「捨」の意味で用いられている。「舍」と「捨」は実質的に画数の違いであると言ってよいであろう。

しかし第七の箇所の「之」と「的」の差異は大きい。というのはおもに前者は文言文で、後者は白話文で用いられるように

思われるからである。要するに、「之」は文語に、「的」は口語に属するからである。言い換えれば、前者は視覚的に理解される語として、他方後者は聴覚的に理解される語として通用していると認識されるからである。

『造物主垂象略説』は全体として白話文で書かれている。読み手として民衆を視野に入れているのであろう。それだけでなく聴き手としても民衆を視野に入れているはずである。宣教師とカテキスタは教会を訪れるさまざまな階層の人たちにキリスト教の教義 (dogma) やカトリックの教理 (doctrine) (『百瀬文晃』「教義」『岩波 キリスト教辞典』、二八七頁) を易しい言葉で説き明かさなければならぬ。そのときの一種の手引書が『造物主垂象略説』であるのではないのであろうか。つまり、『造物主垂象略説』は知識人が読んでカトリックの教えを知ることが期して書かれたものではなく、宣教師やカテキスタがカトリックの教えを広く民衆に伝えるために民衆に読んで聞かせることを念頭に置いて書かれているのではないのであろうか。

従っておもに文言文で用いられることの多い「之」という文字が白話文で用いられる「的」という文字に書き換えられなければならないことは言うまでもない。このことは徐家匯本とパリ国立図書館本（漢籍第六九一五番の二）が他の版本より先に存在したことを物語るものではないであろうか。

「天主豈是欺瞞得的、」以下の最後の部分は徐家匯本とパリ国立図書館本とはちょうど七葉裏の一行めの一字めから六行め

の十六字めまでの箇所当たっている。この部分は書き加えられたものと考え余地はないであろうか。

この部分では前置される語が連体修飾語であることを示す「之」が四行めの「必無之理」という語の中にも現われる。書き手は自然の勢いで五行めにおいても「之」を用いて「二家之像」と書いたのではないであろうか。

両者のうち、前者の「必無之理」の「之」を「的」に置き換えることは難しいのではないであろうか。というのも「必無之理」は文言文的な響きを伴うように思われるからである。「周易繫辭上傳」には「易簡而天下之理得矣。」(高田真治・後藤基已訳『易経 下』岩波文庫、二二二頁)とあるように、「天下之理」という語が記されている(『角川 大字源』では「理」の四番めの字義である「ことわり。すじ。すじみち。」の用例として『易』のこの箇所が引かれている(二一六六頁))。「之理」という形式は文言文において固定された措辞形式ではないであろうか。

他方「二家之像」の場合、「之之像」という措辞は固定化された文言文的な形式ではないであろう。従って「二家之像」については、口語的な語と見なされ得る「的」という文字を用いて「二家的像」と言い換えることが可能であろう。これにより全体の文章が一貫して白話文的な趣を有するようになるのではないであろうか。

七葉表の一行めから始まる「天主豈是欺瞞得的」以下の文章

は全体的に白話文的な趣を有しているが、「二家之像」が文言文的な様相を呈する。しかもここで「釋道二家」の批判が短く唐突な形で述べられている。以上から七葉表の文章が六葉裏の九行めの「後世必定下地獄、不得升天。」までの文章に新たに書き加えられた可能性を考えてみたいのである。

こうした推測が正しいとすれば、パリ国立図書館本(漢籍第六九一五番の二)と徐家匯本は他の臺灣學生書局本、ベルリン国立図書館本、ローマ・イエズス会文書館本、内閣文庫本より時間的に先に位置するのではないかと思われる。

#### 付記 二

二〇一六年十二月二十八日及び二十八日に台湾中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館を訪れ、『明清間耶穌會士譯著提要』(臺灣中華書局)所載(四二三頁)の『聖像略説』―傅斯年図書館の「全文影像資料庫」の検索目録では『造物主垂象略説』(F102R)―を閲覧し、パリ国立図書館所蔵漢籍第六九一五番のものと同格と字形に留意して比較してみたところ、一字を除いて同一であった。それは五葉表一行めの箇所である。徐家匯本では「聖賢」となっているところが、パリ国立図書館所蔵本では「聖蹟」となっている。しかも後者の「蹟」の字は全体の中で僅かに趣を異にしているように感ぜられてならない。つまり、「聖賢」の「賢」の字を後で「蹟」の字に直したのである。川瀬一馬『古活字版之研究』(安田文庫、一九三七年)によれば、「古活字版に於ける誤植の訂正法」には二つあり、一つは「吳

粉を以て誤植を消去して其の上に活字を捺印するか、若しくは墨書を以て訂正を行つてあるもの」（六四二頁）、そしてもう一つは「活字を以て捺印した小片紙を張紙して訂正を加へたもの」（同頁）である。「文祿年間朝鮮活字印刷術の傳來以後寛永年間に至る活字を以て印行せられたる書籍」（一三二頁）を指し示す日本の「古活字版」と明清期の中国の活字本とは事情が異なるうが、参考になる。いずれにせよ訳者はパリ国立図書館所蔵本における誤植の訂正の方法について判断することが出来なけれども、徐家滙本がパリ国立図書館本より時間的に先に位置するというとは言えるのではないかと思う。

追記

昨年二〇一六年の八月と十二月に台湾の中央研究院の傅斯年図書館を訪れ、貴重な資料を閲覧することが出来た。図書館の流通組のスタッフの皆さんに大いに助けられた。記して衷心より感謝するものである。